

## キャンパスライフサポートに求められるもの —臨床心理士の立場から— (第2報)

山倉 辰裕<sup>1)</sup>・薄木 佳苗<sup>1)</sup>・花村 知子<sup>1)</sup>・村松 公美子<sup>2)</sup>・熊谷 綾子<sup>3)</sup>

1) 新潟青陵大学キャンパスライフサポート室

2) 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科

3) 新潟青陵大学健康管理センター

キーワード：キャンパスライフサポート、プラットフォーム型モデル、Moodle

## Roles Required for a Better “Campus Life Support” — from a perspective of Clinical Psychologist —

### The second report

Tatsuhiko YAMAKURA<sup>1)</sup>, Kanae USUKI<sup>1)</sup>, Tomoko HANAMURA<sup>1)</sup>,  
Kumiko MURAMATSU<sup>2)</sup>, Ayako KUMAGAI<sup>3)</sup>

1) Campus Life Support Room of Niigata Seiryō University

2) Graduate school of Niigata Seiryō University, Department of Clinical Psychology

3) Health center of Niigata Seiryō University

Key words : Campus Life Support, Platform Type Model, Moodle

### I. はじめに

筆者らの勤務するキャンパスライフサポート室(以下：サポート室)は、教員の行う学生相談とは別の相談機関として、臨床心理士を配属し開室された。2009年7月、平成21年度文部科学省「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム(学生支援GP)に、「新潟青陵トリプルサポートプログラム」が採択され、その三本柱の一つとして位置付けられている。第1報(2010)では、開室から2010年度前期までの取り組みを紹介するとともに、学生を対象としたアンケート調査を基にサポート室に求められる役割を考察し、報告した。その中で、①何でも相談窓口、②キャリア発達支援、③グループワークによる支援、の3つの機能が有効であると唱えた。アンケートの結果から、学生の中には潜在的な相談へのニーズと相談することに対する抵抗感の両方があり、より気軽に相談できる相談機関が求められていると推察された。そして、基本的な相談に応じつつ、相談内容に応じて適切な学内外の相談機関や教職員を紹介できる、学内支援体制におけるコーディネー

ターとしての機能が必要であると考えた。すなわち①何でも相談窓口の機能である。また、将来に対する不安を抱えている学生が多く存在していることが明らかとなり、進路決定のための現実的な支援と、相談や心理テストなどを用いた内的な支援の両方が必要であると推察された。②キャリア発達支援の機能である。そして、個人的に来室し相談したいというニーズに加えて、複数で来室したい、他学部や他学科の学生と交流したいという学生も存在することが分かり、③グループワークによる支援の有効性も示された。さらに、より機能的かつ柔軟な学生支援が可能となるよう、個別的な問題を抱えた学生に対するいわゆる「従来型の学生相談モデル」の枠組みを越えるものとして、大学全体の学生や教職員と力動的に共生および協働するキーステーションとして位置する本学独自の「プラットフォーム型」相談モデル構造を想定していく方針を示した。その方針に沿って支援活動を行う中で、新たな課題や再度検討が必要な取り組みも見えてきた。

本稿では、2010年度後期から2011年度前期までの取り組みと利用状況について報告するとともに、2010

年に引き続き実施したアンケート調査の結果や利用状況について、比較し検討する。そこから、サポート室の認知度や利用目的の変化を明らかにし、本学学生の特徴やニーズにサポート室がどう応えていけるのか、どのように学内で連携していけるかを考察する。

## Ⅱ. アンケート調査

### 1. 方法

#### (1) 調査対象と手続き

新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科及び福祉

学科、同短期大学部幼児教育学科及び人間総合学科の4学科に在籍する学生565名に対し、サポート室及び就職課に関する質問紙調査を実施した。主な調査対象は、これから就職活動を控える相談活動の対象となる可能性の高い、大学3年生と短期大学2年生とした。福祉心理学科3年生、幼児教育学科2年生及び人間総合学科2年生は2011年4月のオリエンテーションで実施し、看護学科3年生のみ2011年1月に講義の中で実施した。看護学科の学生は、アンケート実施時には2年生であったが、本研究では集計の都合上3年生と表記することとした。

各学科とも一斉方式により、調査に同意のあった

表1 キャンパスライフサポート室に関するアンケート

1. あなた自身について教えてください。【学科、学年、性別】
  2. キャンパスライフサポート室をこのアンケート以前から知っていましたか？ はい・いいえ  
（「はい」を選択した人は3へ、「いいえ」を選択した人は6へ進む）
  3. キャンパスライフサポート室の場所を知っていますか？ はい・いいえ
  4. キャンパスライフサポート室をどのようにして知りましたか？  

・オリエンテーションで聞いて	・N-COMPASS（学内電子掲示板）を見て	・掲示物を見て
・人から聞いて（先生・友人・その他）	・その他（自由記述）	
  5. 今までに利用したことがありますか？ はい・いいえ
  6. 今後、利用してみたいと思いますか？ はい・いいえ・どちらでもない
  7. 利用のしにくさがあるとすればどんなことですか？（複数回答可）

a. サポート室の場所が行きづらいところにあるから。
b. 開室時間に行くことができないから。 →利用しやすい時間帯があれば教えてください。
c. 何をするとところか分からないから
d. 相談するのが恥ずかしいから
e. 一人では行きづらいと感じるから
f. その他（自由記述）
g. 利用しにくいと感じていることはない
  8. 来室するとしたら、どのようなことで利用してみたいと思いますか？（複数回答可）

a. 相談したい	<table border="0" style="margin-left: 10px;"> <tr> <td>・進路</td><td>・資格</td><td>・就職</td><td>・将来</td><td>・家族</td><td>・友達</td> </tr> <tr> <td>・クラブ、サークル</td><td>・アルバイト</td><td>・実習</td><td>・学習</td><td colspan="2"></td> </tr> <tr> <td>・自分の性格</td><td>・経済的な問題</td><td>・一人暮らしで心配</td><td>・ジェンダー</td><td colspan="2"></td> </tr> </table>	・進路	・資格	・就職	・将来	・家族	・友達	・クラブ、サークル	・アルバイト	・実習	・学習			・自分の性格	・経済的な問題	・一人暮らしで心配	・ジェンダー		
・進路	・資格	・就職	・将来	・家族	・友達														
・クラブ、サークル	・アルバイト	・実習	・学習																
・自分の性格	・経済的な問題	・一人暮らしで心配	・ジェンダー																
b. 雑談をしたい、休憩をしたい																			
c. 困っていることについてアドバイスが欲しい	d. 心理テストを受けてみたい																		
e. その他（自由記述）	f. 利用してみたいと思わない																		
- （8. で a. 相談したい〔進路・資格・就職・将来〕と答えた方のみお答えください）
9. 相談のために、自主的に就職相談室（就職課）を利用したことはありますか？ はい・いいえ
  10. キャンパスライフサポート室で、就職・進路の相談ができることを知っていますか？  
はい・いいえ
  11. キャンパスライフサポート室で、職業適性検査が受けられることを知っていますか？  
はい・いいえ
  12. 最後に、今困っている事があれば教えてください。普段の生活の中で感じていることを、どんなことでも構いませんので教えてください。（自由記述）

学生を対象に、無記名方式で実施した。有効回答は520名（男子41名、女子463名、無記入16名）、内訳は、看護学科68名（男子4名、女子62名、無記入2名）、福祉心理学科112名（男子26名、女子82名、無記入4名）、幼児教育学科129名（男子4名、女子122名、無記入3名）、人間総合学科211名（男子7名、女子197名、無記入7名）であった。なお、集計には白紙回答以外すべて採用し、回収率は92%であった。

## (2) 調査内容

設問1では学生の基本属性について、設問2～5ではサポート室を認知しているかどうか、設問6～8ではサポート室の利用について、選択式で回答を求めた。設問9～11では就職課の利用と就職に関するサポート室の利用について選択式で回答を求め、設問12では現在困っていることについて自由記述で回答を求めた。設問9以降は2010年にはなかった新設項目である。質問項目を表1に示す。

## 2. 結果

全体を通して、選択肢以外の箇所に丸を付ける、無記入などの回答は全て「その他」と名付け集計した。ただし、「その他」を選択した場合に、その後、自由記述で回答を求める設問については、「その他」と「無記入」は区別して集計した。設問3,4,5については、設問2で「はい」を選択した254名のみの回答を採用した。また、設問9については、設問8でa.「相談したい」を選択し、相談したい内容として「進路」「資格」「就職」「将来」を選択した343名のみの回答を採用し集計した。

### (1) 認知度について（設問2～5）

2010年と2011年で比較してみると、サポート室の名前や存在を知っている学生は2010年で21%、2011年では49%であり、認知度の向上が示された。各学科別にみえていくと、大学の看護学科と福祉心理学科では「はい」が50%以上であるのに対し、短期大学の幼児教育学科と人間総合学科では50%を下回っており、短期大学における認知度が低いことが示唆された。

（図1）また、サポート室の場所まで把握している学生は「はい」28%、「いいえ」68%、「その他」4%であり、2010年と比べてほとんど増減はみられなかった。更に認知度を高めるためには、スタッフが学生の前に足を運んでアナウンスをする機会に加え、学生がサポート室に足を運んで部屋の雰囲気や利用

するイメージがつかめるような機会を増やしていくことが必要であると考えられる。

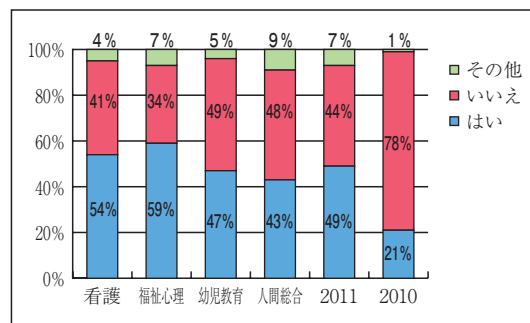


図1 サポート室を知っていたか

サポート室をどのような広報手段で知ったかにおいては、学年別・学科別オリエンテーションが52%、掲示物が25%と2010年に比べそれぞれ増加していた。オリエンテーションに直接スタッフが足を運んで、サポート室の利用や配布資料について説明を行ったことや、掲示物の拡充に努めたことの効果が確認された。一方で、N-COMPASS（学内電子掲示板）から情報を得ている学生は5%と減少していた。本学ホームページ内にトリプルサポートプログラムのWebページを新たに設け、企画のアナウンスや活動報告などを行ってきたが、その効果はまだ確認することはできず、インターネットを用いて情報を得ている学生はまだ少数であることが示された。オリエンテーションなどで、学生にアクセス方法を知らせるのはもちろん、その場でWebページを一度開いてもらってBookmarksの登録を促すなどの工夫が必要であろう。

### (2) 利用について（設問6～8）

現在までに利用したことのある学生は「はい」5%、「いいえ」89%、「その他」6%であった。今後、利用したいと思っている学生については、新たに設けた「どちらでもない」が56%と最も高かった。「はい」と合わせると86%を超え、サポート室の利用に関して肯定的に捉えている学生は多いことが示された。関心はあるが実際の利用には至っていないという学生が多く潜在していることが推察できる。また、大学と短期大学を比較すると、認知度とは逆に、「はい」と答えた学生は短期大学の方が多かった。短期大学においては認知度の向上が、大学においては利用に関する敷居の高さが課題となると考えられる。（図2）

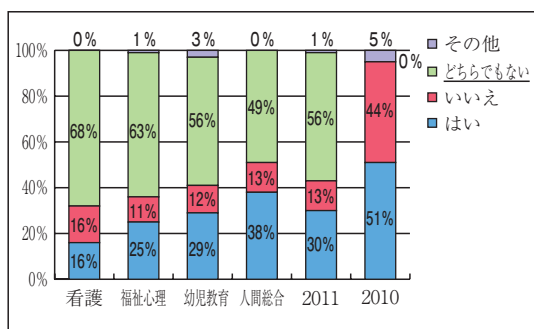


図2 今後、利用したいと思うか

※ 選択肢「どちらでもない」は2011年で新たに設けた

利用しにくいと感じる要因としては「一人では行きづらい」26%が最も高く、次いで「何をするとところか分からない」20%、「相談するのが恥ずかしい」11%となった。名前や存在について知っている学生は増えてきているが、サポート室の目的や利用に関してまではまだまだ認知されてないと考えられる。加えて、個人で来談して相談するというのに抵抗を感じる学生、恥ずかしさを感じる学生も多く存在していることが示された。(図3) また、利用しやすい時間帯を自由記述で回答を求めたところ、6名の回答が得られた。3名が16:00以降を、他の3名は午前や昼間の時間帯を挙げ、回答にバラつきが見られた。その他の利用のしにくさについて自由記述で回答を求めたところ、16名の回答が得られた。ここでも「どこにあるか分からない」などの認知度に関するものと、「大きな悩みでないと行けない気がする」などの相談に対する敷居の高さを感じているような記述が目立った。

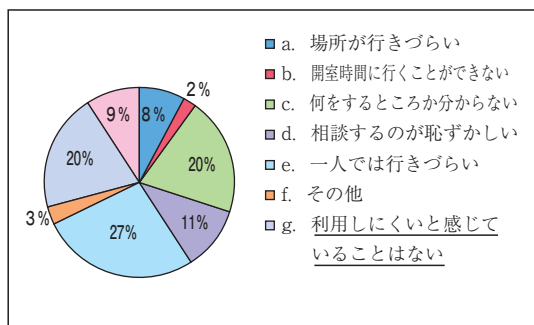


図3 利用できない・しにくいと感じる点 (複数回答可)

※ 選択肢gは2011年で新たに設けた

どのようなことで利用したいかについては、2011年では「相談」46%、「心理テスト」23%の順に高く、2010年に比べそれぞれ増加していた。反対に「雑談、休憩」は8%と減少していた。また、相談し

たい内容については2010年と同じく「進路」21%、「就職」27%、「将来」15%、「資格」8%など就職や進路に関するものが多く、全体の70%以上を占めた。また、「性格」が9%と大きく増加していた。学科別に見ていくと看護は「実習」「学習」、福祉心理は「資格」、幼児教育は「実習」、人間総合は「性格」の割合が特徴的に高かった。将来や就職に関する不安はどの学科においても共通して高いということに加え、各学科によって不安を感じている部分に違いがあることも示された。(図4)

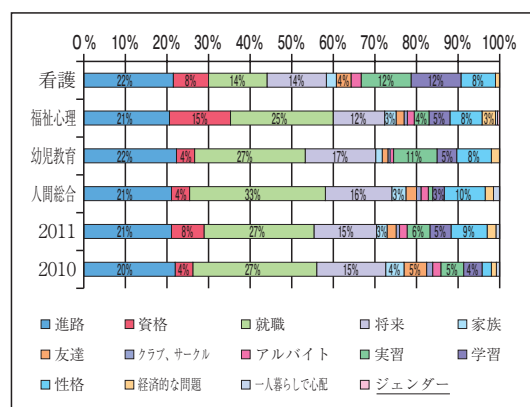


図4 相談したい内容

※ 選択肢「ジェンダー」は2011年で新たに設けた

(3) 就職活動におけるサポート室、就職課の活用について (設問9～11)

就職や進路の相談のために、自主的に就職課(就職相談室)を利用したことのある学生は全体で20%であり、少数であった。しかし、学科別で比較してみると一番高い人間総合学科37%、と一番低い看護学科では0%と学科間で利用率に差がみられた。看護職、福祉職、一般企業など、目指す就職先の募集がいつ出されるかによって、各学科の就職活動に取り組み始める時期が違っていていると考えられる。(図5) サポート室で就職・進路の相談ができることを知って

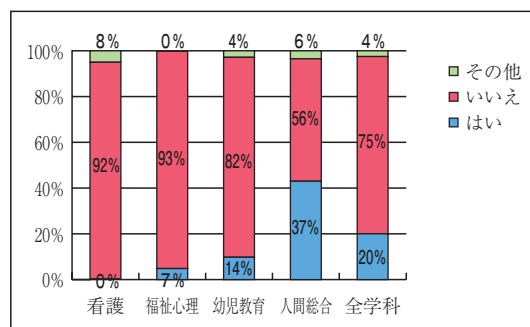


図5 自主的に就職相談室を利用したことはあるか

いるかについては、「はい」34%、「いいえ」62%、「その他」4%であった。また、職業検査を受けられることを知っているかについては、「はい」25%、「いいえ」71%、「その他」4%であった。どちらも、各学科で多少の差は見られたが、全体として知っている学生は3割程度であった。今後は、いつ頃から就職活動を始めるのか、どの時期にどんなサポートを期待するのか、各学年・学科別に細かい調査を行う必要があるだろう。その上で、就職活動に利用できる学内資源についてどのようなものがあるのか、利用のためにはいつ・どこで・誰に・どんな手続きをすればよいか、利用するとどう自分の役に立つのか、など学生が具体的なイメージを持てるような周知を図ることが必要であると考えられる。

#### (4) 自由記述から（設問12）

現在困っていることについて自由記述で回答を求めたところ、52名の回答が得られた。内訳は、就職や進路に関するものが36名、性格など自身に関するものが6名、対人関係が4名、生活全般に関するものが6名であった。相談したい内容と同じく、ここでも就職や進路に関するものが半数以上を占めた。また、「不安」「分からない」などの言葉を用いて漠然と不安を訴えるような記述が多く見られた。以下に、抜粋した回答を載せる。（表2）

表2 今、困っていること（自由記述）

・国試にちゃんと受かるか…ということ	進級できるか…ということ
・就職が困難と聞いてとても不安です。	
・進路について、卒業後は就職にしようか、専門学校に行こうか迷う。	
・どんな職業が向いているか、興味をもったので、適性検査を受けてみたいと思う。	
・将来が本当に不安です。今何が…	
・自分の将来について見えてこない。何になりたいか全く分からない。	
・就職が始まるけれど、何をすれば良いのかわからない。時間が足りない。	
・就職で自分の行きたい地域で募集があるか不安。就職後の1人暮らしが不安。	
・就職についてやりたいことも見つからない。説明会に行っても行きたい場所がない。	
・自分の性格が知りたいです。利用してみたいです。	
・日々生活でだるさが目立つ。目標があるけれど、だるさがあり意欲が出ない	
・友達関係とかうまくいかない。	

### Ⅲ. 利用状況とこれまでの取り組み

#### 1. 利用状況

2010年度（2010年4月～2011年3月）は利用人数82人、のべ相談件数131件であり、来談率は約4.9%であった。相談内容では自身の心理状態や性格に関する相談が一番多く、次いで就職や進路に関する相談、人間関係についての相談が多かった。また、現在までに集計を終えている2011年4月～6月分の相談件数を見ると、利用人数51人、相談件数125件とすでに2010年度の半数を上回っている。通常の相談件数が増えているというのもあるが、心理検査を希望する学生の数が増えたことが大きく影響している。これは、就職課と連携し、就職活動に取り組んでいる学生、あるいはこれから取り組む学生に対して、積極的に心理検査の実施を呼び掛けた結果であると考えられる。1年間、学生に対する周知と学内連携に力を注いできた結果とも言えるだろう。（表3）

#### 2. 2010年度後期から現在までの取り組み

以下は、2010年度後期から現在までに開催した主な企画である。今後の取り組みや企画については考察で述べることとする。（表4）



表3 相談件数内訳2010年4月～2011年6月

集計期間	2010/4/5 ～2011/3/31	2011/4/1 ～2011/6/31
開室日数	200日	51日
利用人数	82人	57人
相談件数	131件	79件
人間関係（友人、家族、クラブ）	19件	5件
心理・性格（性格、適性）	35件	22件
進路・就職（適性、就職、進学、将来）	23件	5件
学業（履修、実習、資格）	7件	2件
体調（倦怠感、いらいら、不安など）	8件	7件
職業検査希望	1件	6件
心理検査希望	16件	30件
その他	16件	2件

表4 企画一覧

日 程	タイトル	内 容	参加者
2010年8月	『出張サポート室』3日間	出張相談	0名
8月	『YGテストを受けてみよう』3回	グループワーク	12名
10月	『自分のことを知って、色々な人と関わってみよう』	グループワーク	2名
10月	『自分を理解し、就活や生活に役立てよう!!』	グループワーク	0名
11月	『就職・学生生活何でも相談』3日間	就職課合同出張相談	4名
2011年1月	『先輩たちはどうやって就活したの?! ～就活方法編～』	就職課合同セミナー	14名
1月	『自分を知ることからはじめよう～自己理解編～』	就職課合同セミナー	19名
5月	『自分を理解し、就活や生活に役立てよう!!』	グループワーク	4名
6月	『自分の気持ちを伝えてみよう!』	グループワーク	1名
6月	『出張サポート室』2日間	出張相談	2名
7月	『夏休み直前! 就職活動セミナー』4日間	就職課合同セミナー	7名
5～8月	『YGテストを受けてみよう』8回	グループワーク	17名

#### Ⅳ. 考察

##### 1. 何でも相談窓口としての機能

第1報（2010）で、サポート室は学内支援体制におけるコーディネーターの機能を持っているとし、どんな相談でも受け入れ他部署と連携をしていくためには、相談に訪れた学生への臨床心理学的な視点に基づいた的確な見立てが必要であると述べた。そ

の後、サポート室の認知度が高まり相談件数が増加するとともに、学生相談を担当する教員や健康管理センターに紹介が必要な学生、病態水準の見立てが難しく対応に迷う学生も来談するようになった。それに伴って、どこの部署がどの程度までどういったサポートを学生にするか、学生の見立てや対応についてスタッフ間や関係部署間で共通認識を図る必要性と、そのためのツールが必要となった。サポート

室では、小泉（2010）が翻訳したイギリスの学生相談学会（AUCC）の深刻度スケール（Severity Rating Scale）と、吉良ら（2007）の作成した「学生生活不適応度」の評定基準を基に、独自のアセスメントツールとして「キャンパスライフサポート室におけるアセスメントと対応」を作成した。評定は学生の精神的な病理の水準よりも、学生の悩みや不安がどの程度大きいのか、それによって学生としての生活（学業・対人関係・日常生活・家族関係）にどの程度の支障が生じているかによって4段階に分けた。加えて、評定に応じた具体的な対応も4段階で設定した。「段階1」「段階2」であれば、サポート室を中心とした対応を行い、「段階3」以降では、学生相談、健康管理センター、アドバイザー、教務課等と対応を検討し連携しながらサポートを行うとした。これにより、よりの確な見立てとそれに即した一貫した対応、他部署と連携しながらの継続的な支援が可能となった。

また、2011年4月にトリプルサポートプログラム専用のファイルサーバーを新たに設置し、関係部署間で必要な情報を共有できるようにした。そこにサポート室予約シートを置き、職業興味検査や心理検査の申し込み、相談予約を就職課からも行えるようにした。これにより、就職課からサポート室の利用につながるケースは飛躍的に増加した。サポート室に対して敷居の高さや閉鎖的な雰囲気を感じていた学生や就職活動に活用できることを知らない学生が、就職課を通すことで来談に至ったと考えられる。各部署との連携を強化していくことは、学生をチームで継続的に支援していくことにつながり、今後は、そのための窓口、調整役としての機能がサポート室にはより求められてくるのではないだろうか。

## 2. キャリア発達支援の充実

就職や進路など将来に対する不安を感じる学生をどう支援していくか、潜在的ニーズを抱えてはいるが実際の利用には至らない学生とどうつながるか、開室当初からの課題であった。2011年のアンケートからも就職への不安や相談に対するニーズは高いことが確認されたが、就職課やサポート室を積極的に利用するまでには至っていないことが明らかとなった。この背景のひとつとして、就活に関して具体的に困っていることがある学生よりも、就活を目の前にして不安の高まっている学生が多いことが推察される。日本学生支援機構（2007）は、昨今は

就職活動の早期化によって自分らしさを模索する時期が狭められ、進路の選択肢が複雑になり、適性を見定めることが難しくなっていると指摘し、多様な模索を可能にする支援の必要性を述べている。サポート室にも、自分の適性に悩み就職活動や学業に積極的に取り組めない、将来に不安を感じているが何から手をつけていいのかわからないといった主訴を抱えた学生が、相談や職業興味検査を申し込んでくる。

新たな試みとして、サポート室単独で今まで開催してきたものとは別に、就職課と合同で『就職・学生生活なんでも相談』と題した出張相談を2010年11月に開催した。更に、サポート室と就職課で就職セミナーを企画し、2011年1月に『就活編』『自己理解編』と内容を変えて2回開催した。就職課との合同にすることで、連携を深めるのはもちろんのこと、サポート室でも就職活動や進路選択に関する相談に対応していることを、学生に示す狙いがあった。2011年7月には就職課企画のセミナーの中にサポート室見学のプログラムを組み込み、相談以外や心理検査以外の場面で直接学生がサポート室に足を運ぶ機会を設けた。今後は低学年からのキャリア発達支援として、就職活動に取り組む前の早い段階への学生支援もより必要と考える。また、アンケートの結果から、学科別で相談に対するニーズや就職活動に取り組む始める時期が異なることが示された。全学生向けの企画に加え、後期からは対象とする学生を絞り込み、学科・学年別のグループワークを開催していく予定である。現時点では大学に比べ認知度の低かった短大向けの学科・学年別見学会を企画している。オリエンテーションにおける宣伝も認知度を高めるために有用であることが示されたため、後期オリエンテーションにおいても、サポート室の利用や各種企画についてのアナウンスを行う予定である。

## 3. グループワークによる支援

2010年8月から、サポート室を必要としている学生への導入、学生同士の交流促進と自己理解へのサポートを目的として、グループワークを開催してきた。就職からも参加の申し込みを可能にしたことと、アナウンスを積極的に行ったことで、参加人数は開催当初に比べると増加している。特に、YG人格検査を用いたグループワークは人気があり、ほぼ毎回定員に達している。定員から漏れてしまった学生や開催日にどうしても都合のつかない学生は、個別実施に

においてできるだけ対応するようにしている。すでに就職活動を始めており、「就職試験に出題されるため」と具体的な目的を持って申し込む学生も多いが、「自分の性格を知りたいと思ったから」と就職活動に取り組む前に自己理解を深めたいという学生も多かった。実施する内容やテーマに関わらず、参加した学生が他学生との交流体験が得られるよう、その交流を通して自分自身の性格や感情に目が向けられるよう心掛けた。友人同士で参加する場合もあったが、そうでない場合、参加することで日常の学生生活ではなかなか得られにくい学年・学科を越えた交流が行われた。参加者の中には「他の心理検査や職業興味検査も受けてみたい」と再度来室する学生や、やりとりをする中で個別の対応が必要と思われる、相談につながった学生も存在した。相談への導入としても心理検査は有効であると考えられ、心理検査を用いたグループワークを継続して開催していくことは、来談に対する敷居を低くしていくことにもつながっていくと考えられる。今後は、グループワークの開催頻度を増やし定着化を図ると同時に、参加した学生の交流がその場だけで終わらず継続した関係に発展していけるような工夫が必要である。グループワークの開催を通して、参加した学生同士がピア・サポート的な人間関係を築き、学生間で相談し合える環境を整えていけるよう取り組んでいきたい。

#### 4. Moodleの活用

Moodleはインターネット上で授業用のWebページを作るためのオープンソースLMS（Learning Management System：学習運営システム）であり、eラーニング用のプラットフォームとして世界中で利用されている。テストや課題、履修登録や授業評価、アンケート調査などに加え、チャットなどのコミュニケーションツールとしても用いられ、日本においても多数の高等教育機関で利用されている（2008）。奥村ら（2006）は三重大で全学的に試験運用の後、広範なカスタマイズを施した三重大学版Moodleを構築し、活用の現状と課題について報告している。また、本学でも数年前から運用が開始され、情報処理の授業などで使用されている。サポート室では、これまで紙媒体におけるアンケート調査を2010年から年1回実施してきたが、準備や集計作業、実施場面の設定の問題でこれ以上頻度を増やすことを難しく感じていた。しかし、質問項目の作成が容易であ

り、調査結果が自動で算出されるMoodleを用いることで、こまめにアンケート調査を行うことができる考えた。トライアル版として、2011年8月に本学福祉心理学科2年生にMoodleを用いたアンケート調査を実施した。授業の時間の中でPCを準備させ、一斉方式により調査に同意のあった学生を対象として実施した。受講学生数79名に対し、回答数は68（回答率86%）であった。

Moodleを使用する利点として調査結果をその場で確認できるということがあげられる。今回はトライアル版として実施したため、結果のフィードバックについては検討中であるが、次回以降はリアルタイムで調査結果を学生にフィードバックすることも考えている。そうすることで、学生は自分の回答がどのように受け止められ、どこにどう反映されるのかを知ることができる。また、スタッフが意見や要望に対して直接フィードバックを行うことで、従来の一方向的な調査ではない、双方向的なコミュニケーションを学生との間で行うことができる。本学では入学した全学生にノートPCが貸与されるということもあり、Moodleをサポート室と学生とを繋ぐ新たな媒体として捉え、アンケート調査以外の活用方法も探っていこうと考えている。

## VI. おわりに

本稿では、2010年に引き続き実施したアンケート調査の結果を、年度、学科で比較しながら考察した。その中で、認知度の向上と利用に関する敷居の高さが依然として課題となること、各学科のニーズにあった支援や企画の必要性が確認された。また、現在までの利用状況と取り組みについて、①何でも相談窓口②キャリア発達支援③グループワークによる支援の3つの機能を中心として検討した。

今回は、今後の課題を中心に述べたが、これらの方向性をもとに、学内の各部署と連携をとりながら、具体的な支援策や企画の立案を進める予定である。また、全学生に対して、Moodleを活用することにより、全学生とキャンパスライフサポート室スタッフとの「リアルタイムな繋がり」を目指している。そして学年・学科・個人による様々なニーズに応じて、より極め細やかなサポート室の支援の充実を図りたい。さらに相談スタッフの専門性の向上とともに、「プラットフォーム型」相談モデル構造に基づき、学内連携の更なる強化に向けて努力したい。



## VII. 文献

- 喜多敏博・中野裕司（2008）：オープンソース e ラーニングプラットフォームMoodleの機能と活用例『情報処理』49(9)、1044-1049
- 日本学生支援機構（2007）：大学における学生相談体制の充実方策について―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」―、7-9
- 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会〔編〕（2010）：『学生相談ハンドブック』学苑社、59-60、185-201
- 岡田淳子・山倉辰裕・薄木佳苗・村松公美子・熊谷綾子（2010）：キャンパスライフサポートに求められるもの―臨床心理士の立場から―（第1報）『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』4、33-40
- 奥村晴彦・下村勉・秋山實・須曾野仁志・杉浦徳宏・中島英博（2006）：三重大学におけるMoodle活用の現状と課題『第2回CMS研究会情報処理学会研究報告』、23-28
- 吉良安之・田中健夫・福留留美（2007）：学生の相談来談者の学年ごとの問題内容と学生気の諸課題『学生相談研究』28、1-13